

【解説】これを、新聞やテレビしか見ない人がいきなり読んでも、理解しにくいかもしれない。しかし逆に言えば、この観点からでなければ、現在の世界情勢は理解できないとも言えるだろう（メディアは肝心のことは言わないようにしている）。デイヴィッド・ウィルコックの『ザ・シンクロシティ・キー』や、これまでの彼のブログ記事の文脈でこれを読めば、よく筋が通るであろう。彼のオンライン本 *Financial Tyranny* に逸早く強い反応を示し、大々的に放映したのは、ロシアのテレビであった。彼が何度も言及する世界的な隠れた「同盟」の存在も、なるほどと思わせる。5月6日掲載の「ヨーロッパ市民団体の気象操作糾弾と EU」をこれと併せ読めば、なお合点がいくと思われる。この論文は、Dane Wigington のほとんど連日の記事と同じく、悲痛な訴えである。なお、この観点を理解するのに、馬淵睦夫氏のユーチューブ「グローバリズムの罫——国難の正体」が参考になると思われる。

ウクライナ紛争：何が真相か？

——東西の最近の最大の戦争がウクライナに集約——

May 3, 2014

By: StateoftheNation2012.com (GeoengineeringWatch.org に転載)

過去 100 年の間に、地球上で多くの戦争——恐ろしい戦争——が戦われた。しかし中でも最大の戦争がすぐにも始まるかもしれない——もし地球上の人間がこれを止めなければ。ウクライナの壮大な対決は、ソヴィエト連邦崩壊後の世界の超大国間の、最も危険な、前例のない戦争の様相を呈している。本当に、この東と西の衝突は、一次・二次両大戦を除いて他のどんな戦争をも寄せ付けないような、経済的、政治的、宗教的な戦場になる可能性がある。もしこのウクライナ紛争が平和的に解決されなければ、それは全開された第三次大戦のシナリオに発展する潜在可能性をもっている。

これは大げさに聞こえるかもしれないが、この“タイタン同士の戦い”の両側にとって賭けられているものが実は何なのかを読んでみれば、読者は納得されるだろう。ここには歴史上多様な根をもつ、ますます熾烈になる小競り合いとともに展開されていく、非常に深遠な報復合戦がある。一方において真の犯罪者たちは、しばしば自分たちがやっている通りに、やり通そうとしている。他方において、戦う者に勇敢な姿勢を取らせ、一見して手

に負えないような状況に立ち向かわせる、運命の厳然とした力がある。

このウクライナ紛争は基本的に、東西間の、根本的に異なる文化・異なる人種・異なる宗教的方向性をもつ、非常に異なった人々の戦争である。西側での理解の深遠な欠如、彼らが完全に抜け出せないでいる絶望的なアジェンダのために、この戦争は、どういう形にせよ、何らかの形で決着がつくと思われる。しかしそれは、世界が再び弾丸と爆弾の嵐を浴びるだろうという意味ではない。ポストモダンの戦場は、この戦争がアングロ・アメリカン裁可体制の押し付けによってそうなったように、しばしば経済的・金融的な領域へと移行する。

多くの歴史的恨みと文化的憎しみ、また金融の必然性と経済の圧力によって動かされる内在する可燃性のために、この進行中の物語がどう終わるかは全くわからない。幾つかの重要な共同要因が働く一方で、多くの変動要因もまた働いて、非常に危ない現在の進行経路を、全面戦争へと短絡させるかもしれない。それが起こっても、この世界は口にできない試練と災難からは救われるだろう。しかしもし戦争が起これば、事態は、人がこの惑星上のどこに住んでいるかによって、きわめて急速に変わるだろう。

次に、西側・東側双方に計り知れない圧力をかけてきた、主要な金融と経済の共同要因をいくつかあげてみよう――

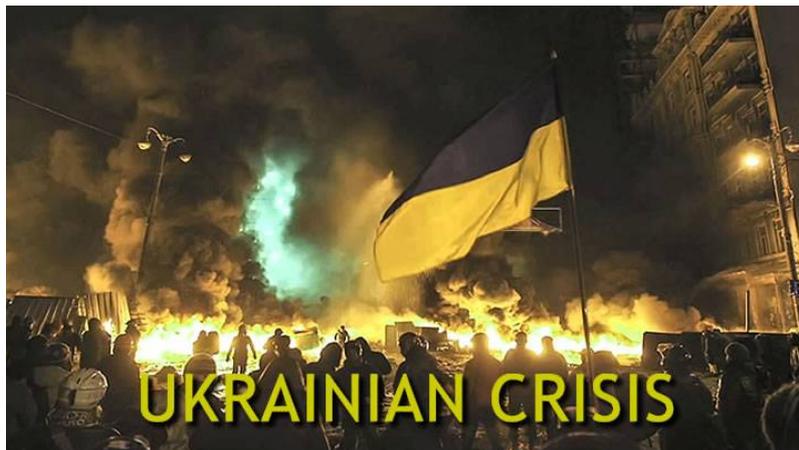
* 西洋の銀行制度は、自爆し嫌悪されて破たんした。銀行は幾ばくもない余命を生きているにすぎない。それらは文字通り自爆するまでの時間を稼いでいる。高レベルの銀行家たちの自殺が増え続けているということは、銀行家か彼らのボスたち、あるいはその両方が、いかに嫌悪されているかの証拠である。現在、T B T F (Too Big To Fail, 大きすぎて倒れようがない) と言われてきた銀行があまりにも多いから、必要とされる連邦準備銀行からの支援は実行不可能になっている。このたった一つの力学によって、西欧列強は、金、貴金属、土地、国家経済そのもの（ウクライナがこれに当たる）を、可能な限りどこからでも盗んだのである。

* 部分準備銀行制度 (fractional banking system) と、それが作り出す不換モノポリシー・マネー（遊戯用貨幣）には、その宿命的な欠陥モデルに組み込まれた終末が常に伴うのだが、これを考えるのがただ恐ろしいために、誰もこれを口にする者がいない。一日一日が過ぎるごとに、この文明全体がその終末日に近づいていく。“地球的経済・金融支配マトリックス” (G E & F C M) の頂点に坐る者たちは、彼らが直面している現実を知っている。彼らはまた、それが世界全体に及ぼす究極の結果を知って恐れている。そのために彼らは、運命の日を食い止めるためなら、可能などんなことで

もするのである。

*グローバリゼーションは、脱出できないほどに、国家共同体を通じて、金融・経済セクターを相互連結してしまったので、すべてのマーケットがそれぞれ、他のマーケットによって深く影響される。2007年の不動産の崩壊と2008年の株式市場の崩壊が示したように、次にはじけるバブルは、すべての市場に悲惨な結果をもたらすだろう。どの一つも別の物に影響される限りにおいて、ドミノ効果が始まるだろう。この時点で最も傷つきやすい市場は、デリバティブ、株式、公債、財貨（特に金、銀、白金のような貴金属）、通貨、そしてもちろん不動産である。

*進行中の“テクノスフィア” (technosphere) の崩壊は、現在、地球規模の気象変化のおかげで加速度がついて、この火に更に油を注ぐことになるだろう。その終末の日々には、デジタル操作は、正しい所有者に返還しなければならない^{きん}金を隠すのに役立つだけになるだろう。同じように、ハリケーン“サンディ”がウォール街を閉鎖させたように、母なる自然によってもサイバー・ハッカーによっても同様につけこまれる、他の多くの弱点や欠陥がある。ますます顕著になっていく“地球経済・金融支配マトリックス”のコントロール喪失は、彼らと世界の他のすべてに、これらの危険な未知数をますます思い知らせることになる。テクノロジーの急速な進歩は、年々“ゲーム”を根本的に変えていくだけでなく、古くなったテクノロジーとそのITインフラストラクチャーは、決然とした意味のあるやり方で扱われなければならない。



ウクライナは「地上最大のショー」として演出されている。

ここに示した要点が示しているのは、2008年以來、第二の大不況を経験して、高度なストレス状態にある世界である。簡便な解決策はなく、多くの避けられない困難が待ち受けて

いるので、“金融支配マトリックス”を支配する者たちは、人々の注意をそらせるために、いろんな地球的ドラマをつくり出すよりほかに、何もできないでいる。彼らが願うのは、彼らが市民社会の最後の崩壊に対処しなくてもいいように、彼らの生きている間に、これら注意を奪う地球的大事件が起こることである。

これが、現在のウクライナ紛争が、西側の金融中心地で、意図をもって操作されている一つの理由である。意志決定者たちは、現実には、第三次大戦のようなシナリオをつくり出す以外に方法がない——過去の 2 つの大戦がまさに同じ都市でつくり出されたように。しかし今回の場合、賭けられているものは比較できないほど大きい。また賭けている者の数もはるかに大きい——直接・間接に巻き込まれている国家の数と同じように。簡単に言えば、地球惑星の“モノポリー・ボード”ゲームの席に座っているすべての者が、ウクライナの衝突の流れの最終結果に、莫大なカネを賭けているのである。

ここに問題の中心点がある——マスメディアによって撒かれている大量のプロパガンダがあまりにも強烈で頻繁であり、西側諸国の深刻な絶望をそれは暴露している。ウクライナが最初に跳び出してからの彼らの多くの行動（と非行動）は、9・11 以来の、彼らの他の違法な、操作された戦争のすべてを凌駕する、戦争への動きを露見させている。今回の大きな違いは、彼らがロシアという凶暴で怒り狂った熊を相手にしていることだ。

ウラジミール・プーチンは、ロシアの意志と決意を体現している。彼はまた東側を代表するとともに、圧倒的な世界的コンセンサスを代表している。

ウラジミール・プーチンという人において、西側は、アングロ・アメリカン枢軸（AAA）が地球惑星の他のあらゆる場所でやっているような、脅し、騙し、巻き上げ、押しつぶしに屈しない、洗練された戦士に立ち向かっている。ウクライナの主権（あるいはその欠如）の純粋さがロシアの安定と安全保障に直接、影響を与えるがゆえに、ここに展開されていく対決姿勢に動揺の余地はない——まったくない！ 押しがいよいよ突きに変わったとき、プーチンは、ロシアを保護し、一にも二にも三にもロシア人民の安全を守るための手段を用いて応じざるを得ないだろう。

確かに、オバマ、ケリー、バイデン、ニューランドらは、彼らがプーチンとロシア議会を追い詰めている非常に深刻な立場を理解している。ロシア議会の両党派がこの問題については、わずかの立場の違いもなく、完全にプーチンを支持していることを理解することが重要である。もっと重要なことは、BRICS 経済連合が完全にロシア支持の立場である事実を認識することで、ごく最近のクリミア併合後の国連決議でロシアに投票するか、棄権した 93 カ国も、おそらくここに含まれる。ロシアは、この決定的な信任投票を、法令の

遡及的な成功と考えている。これは強制されたものだと、アメリカがずっと攻撃していたものだが、実は、従わない国家を脅迫していたのはワシントンである。

あの決定的な国連投票からだけでも、ロシアがいま国連総会でその友邦から享受している、巨大な、前例のない支持が明らかだ。NATO諸国と残りの欧州連合はともに、アングロ・アメリカ枢軸がキエフで「ネオ・ナチを使って」敢行したクーデターの幅広い拒絶に、ひどく驚いている。これらの離反する国家はそれぞれ、万一自分がこの展開する地政学的チェス・ゲームで、間違っただけの土地に住んでいたなら、次には自分がAAAとその代理国のターゲットになり得ることを知っている。

NATO諸国は今——繰り返し劇的に——自分たちはいつでも好きな時に、どこでも、誰をでも、攻撃する意志があることを示している。世界はいま、NATOは全く罰せられることなく、世界の大多数の国家の意見を完全に無視して、行動しようとしていることを知っている。この行動のパターンが、国家共同体にとってあまりにも不安を与えるようになったので、今ではロシアが、AAAとして知られる地球的ガキ大将に立ち向かう、最上の候補とみなされるようになった。

この展開中の地政学的チェス・ボードは、現実には、ロシアが世界管理の法（ダールマ）を維持する義務を果たすように、真の権力者によって配置されている。プーチンは、世界の抑圧された国々の支持を得ていることを知っている。また運命は、彼の側、ロシアの側、BRICSと抑圧された世界の人民の側にあることを知っている。その上、プーチンは、第一次と二次大戦で勝者の側だったので、3がラッキー・ナンバーだと知っている。

歴史は、忍び寄る第三次大戦の影に、重要な見方を与えている。

先の2つの世界大戦が、いかにロシアとその同盟国にとって有利な、現在の地政学的力学を与えたかの意味を理解している人はまれである。最も重要な歴史事実の多くは、次のように2つの主題に還元することができる——

- 1) ロマノフ王朝 vs ロスチャイルド家（とロックフェラー家）
- 2) 現代イスラエル国家の創造

この2つの問題は複雑に関わりあっていて、一巻の歴史を書き直すことによってしか、正しく理解できないだろう。そのような正確な修正によって読者を離れさせるより、むしろ私たちは思い切ってそれらを、いくつかの真理の項目に還元することにした。私たちは、読者がインターネット上でこれらの事実を、自分で確認していただきたいと思う——その

一つひとつが、今ウクライナで演じられている“巨人間の戦争”を解明する、大きな要因になっているからである。

*歴史的に、ロシアは常に独自の道を歩んできた。例えば、アメリカ合衆国として知られるアメリカの実験の進歩と発展において、ロシアは二度、援助の手を差し伸べた——一度は革命（独立）戦争のとき、もう一度は南北戦争のとき。この2つの例で、もしロシア海軍の存在がなければ、両戦争の結果は大いに違ったものになっていたかもしれない。両方の場合とも、ロスチャイルドの莫大な銀行資金が投資され、大きな結果を伴ったこれら2つの戦争で、ロシアの直接介入によって大きな影響を受けた。

*ロシアは習慣的に、ヨーロッパの王家から、あたかもユーラシアの継子であるかのように見下されてきた。その広大な面積と富を略取しようとする者たちが、常に存在した。ボルシェビキ共産主義は、それにうまく成功した一つの西側の計略である。ソヴィエト連邦として知られるその一章は、ヨーロッパのロスチャイルド家と、ロシアのロマノフ家の間のチェス・ゲームの最後の一手であった。それは、ロシアを苦痛と苦悩のるつぼに投げ込んだ悲惨な試みに終わった。そのるつぼの中から、記念碑的な教訓を学んだ、一新された国家が現れた。

*イスラエル現代国家を設立することが、一次・二次両大戦の第一の理由であった。これは信じがたいかもしれないが、現実の歴史を綿密に読んでみれば、この目的が明らかに見えてくる。ロシアは第一次大戦に、不承々々、そして“バルフォア宣言”を利用してユダヤ人をイスラエルへ動員しようとする計略を知らないまま、参加したのだった。第二次大戦の背後にあった隠れた目的を、ソ連がどう理解していたかはわからない。しかし西側列強が、ユダヤ人のパレスティナへの移住をさらに奨励しようとする強い意図をもっていたことは、誰も疑うことはできない。したがって、この地球的な謀略でのロシアの役割は、推測することしかできない。しかし最も大量にそこへ移住したのは、ロシアのユダヤ人たちであり、これは現代イスラエル国家の設立に決定的に重要だった。

*ウクライナは伝統的に、前世紀までユダヤ人にとって安全な場所であった——第二次大戦までは。散発的な抑圧の例はあったものの、この偉大な国家はヨーロッパとアジアにまたがっているために、異なった宗教の融合の場所としての役を果たした。ウクライナの寛容は、常に多くの異なった文化、宗教、人種、国籍によって感謝され、享受されてきた。その位置、大きさ、農業の優越性、工業の力といったものは、常に近隣国や超大国の垂涎の的であった。

*ウクライナは第二次大戦中に、それ自身のホロコーストを経験しているが、これは西

側によって奇怪なほどに軽く扱われた。ニューヨーク・タイムズは“記者” Walter Duranty を雇って報告させたが（１）、彼はホロドモール（Holodomor）と呼ばれる何百万というウクライナ人の民族虐殺（２）を、非常に軽い、間違っただけの考えに導くやり方で説明してのけた。このもう一つのホロコーストはソ連によって行われたものだが、それは実は命令されたもので、ロシア人によって実行されたものでなく、共産主義指導層の隠れた要素（３）によって、特別の理由のために実行されたものである。

暴かれたこうした事実のもたらした結果は、ここに述べたわずかな事実を遥かに超えている。しかし、こうした決定的に重要な歴史的事実を照らしてみると、伝統的に Great Game と呼ばれる、この展開する地政学的チェス対戦の両サイドによる、報復合戦が戦われていることがわかる。このゲームは、かつてのようにクリミアで演じられようと、現在のようにイラン、アフガニスタン、パキスタンのような中央アジアで、また北米大陸で演じられようと、両側からの追及は、常にきわめてエネルギーに満ち、爆発的で、大きな結果を伴った。結局のところ、現在も過去も常に、本当に賭けられているのは、世界制覇に対する国家主権なのである。



ウクライナ：進行するもう一つの CIA 主導の“色の革命”（政権交代）

西側がロシアをいわゆる隅に追い詰めることで、彼らはプーチンの選択を、大きな軍事衝突か、それとも高度に破壊的な、経済/金融戦争のいずれかに厳しく制限している。

いったい誰が、アメリカ大統領、副大統領、国務長官、その他高位の外交官などが、戦争や革命を誘発するために、このような背信の詭弁、日常的裏切り、絶えざる言い逃れを用いる習慣をもっていると考えただろうか？ ホワイトハウスは今、内乱の引き金を引き、

革命を起こすのに必要な、どんなストーリーでも捏造しようとしているように見える。キエフにおける CIA の操作するクーデターを通じて見えてきた彼らの行動は、アメリカ史上、国家戦略の最も陋劣な面を示すものである。

ワシントンの振舞いについて特にショッキングなのは、彼らが地政学的チェス・ボードのあらゆる指し手を用いて国家転覆の計画を進めるとき、彼らの見せる破廉恥さと良心の欠如である。そのようにして彼らはプーチンの忍耐を試してきた。実際、ノーベル平和賞は彼に属するもので（シリアを考えよ）、オバマではない。アメリカの好戦性のために、プーチンは、東部ウクライナ内部で、先制軍事行動を取るように強いられるかもしれない。

これに加えてロシアはまた、ウクライナに対して、一連の金融・経済的イニシアティブを取れるように計画することができ、これはあらゆる現実的目的のために、この国家を無力化するだけでなく、破産のような経済的崩壊へと追いやることのできる。ロシアの、ウクライナを通るパイプを使う天然ガス供給にかかわる同じ戦略もまた、ヨーロッパ全域の生活を非常に不快なものにするであろう——電気が切られ、将来かなりの期間エアコンとヒーターが使えないとなれば。

もしロシアがアメリカに対して、もっとグローバルな戦略を取る決定をするならば、彼らは、BRICS 諸国が一致して行動するときそこに生ずる巨大な梃子の力を、利用することもできる。現在、彼らの金融・経済取引の多くはレーダーの届かぬ所で行われているから、BRICS が用いる戦術が、メディアによって電送されることはない。それらは隠密裏に、可能な限り秘密を保って実行されるだろう。これらの国家、特にロシアと中国は、アメリカ、EU、それに彼らの代理国の、直接の攻撃を受けていることを知っている。インドもまた、ニューヨークに本拠をもつ彼らの外交官に対する二度目の告訴で経験したように、AAA の攻撃下にある。

EU（欧州連合）は、アメリカに次ぐ第二の超大国として機能するようにつくられた。するとロシア、中国、インドは除け者になり、少なくともより容易くコントロールされるだろう、と彼らは考えた。

本当のことを言えば、これこそ欧州連合の背後にある目的だった。完全な NATO の力を背後にもつ、世界で最大の経済的国家ブロックを作ることが、EU の中心的な組織化原理であった。ほかにも沢山あるのだが、新しい統一された軍事力と経済的発電所を構築することが、EU を作るそもそもの理由だった。EU は今、経済と金融の領域内の交渉や、戦争や他の地政学的紛争の問題では、一枚岩的力として役に立っている。しかし EU は、完全に受動的・攻撃的なパートナーとして、ワシントンからの命令を受けることは、快く思っていない

い。それはそれぞれの加盟国が、ブリュッセルからの望まない命令に反応する場合も同じだ。

ユーロ圏全体は、2008年に二度目の大不況が始まって以来、影響力を大幅に失った。特にそれは、EUがあまりにもドイツに支配されてきたので、彼らの意図された影響力が、その境界線外で衰退したのだった。加盟国の多く、特にPIIGS諸国は、もはやアンゲラ・メルケルの財政的第三帝国に歩調を合わせなくなった。そのような隠れた反目が沸騰しており、（ドイツという）一つのエンジンしかない経済連合の結束を覆しつつある。PIIGS諸国は完全にオールを手放してしまった。

のみならず、EUが長い“回復期”の間、ロシアに実質的に依存していたという事情は、AAAに加わるというその決意を弱めている。百年以内にまたしても戦争に引き込まれるという見通しは、ヨーロッパ民衆の望むものではない。しかしブリュッセルの欧州議会の、彼らの非代表的大君主たちは、一次と二次大戦以前からそうであったように、戦争を唯一の解決策と考えている。その証拠に、彼らはまたしてもモスクワへ向かって進んでいる――ナポレオン戦争と2つの世界大戦の厳しい教訓が、十分ではなかったかのように！

結論：

以上のような分析に立ってみると、ウクライナが“千年期戦争”の様相を示し始めていることが明らかになる。何世紀にもわたって互いに反目してきた敵対勢力が、かつての反目勢力のどれよりも深い根をもっている。東側対西側という対立が今や、ウラジミール・プーチン対バラク・オバマとして現れている。プーチンはいま典型的なジレンマに立たされている。彼はこれまでのロシアのリーダーとは違って、必要とあらばどこでも、どのようにしても、「グローバル陰謀団」に立ち向かう意志と勇気をもっている。

これに対してオバマは、正しいことをする意志と、必要な気骨をほとんど持っていない。確かに彼が彼の主人たちに従わなければ、彼と家族の命が危険にさらされる。したがってオバマは、ロシアに対する軍事攻撃と経済攻撃を始めることについて与えられるすべての命令に、従う可能性が大きい。力をもった他の勢力がこの問題に早急に介入しない限り、それはひたすらエスカレートするだろう。それほどに両サイドは勝つ決心をしている。

プーチンにとって“勝つ”ということは、単に母なるロシアへの実存的脅威を無力化することを意味する。ロシアは、西側が、たとえそれが第三次大戦を始めることになっても、現行のアングロ・アメリカ式の略奪資本主義の崩壊を、必死に食い止めようとしていることを知っている。他方、グローバル「陰謀団」は、ウクライナでの勝利以外のことを考え

ていない。彼らは同時に、今言った実存的脅威には傷つきやすく、それは更に西側文明全体を脅かしている。

ウクライナで進行中のかつてない大きな衝突——東と西が最も深遠な根本的な形で対峙している現実——を考えるなら、政治的レベルあるいは外交のフロントでなし得るようなことはほとんどない——西側が折れる以外には。ロシアは特に、西側によって長年の間、どんな標準でも全く受け入れられない極端な形で、苦しめられ騙されてきた。いま最後の我慢の限界がやってきた。そしてウクライナはハルマゲドンの現実の場所になると思われる。

したがって、どなたでもこのエッセーを読まれる方は、この匹敵するものがない“巨人間の戦い”の速やかな、首尾よい解決のために、直ちに祈ってくださるようお願いいたします！もし「機械仕掛けの神」を必要とするものがあるとしたら、この決定的な苦境がまさにそれです。

注：

(1) ニューヨーク・タイムズの載せた、ウォルター・デュランティによるウクライナの「ホロドモール」報告：

「1932-1933のウクライナの飢饉（ウクライナ人はこれを“ホロドモール”と呼ぶ）は、ロシアの独裁者ヨシフ・スターリンによって工作され——NYタイムズへのデュランティの寄稿によって、真実を隠蔽されたものである。1922年から1941年までNYタイムズ紙上でこの国の報道をしたデュランティは、700から1000万人のウクライナ人が死んだこの飢饉を含むスターリンの残虐行為を無視した。デュランティは（スターリンの粛清について）“卵を割らなければオムレツは作れぬ”と言ったとされるが、この大量餓死が告発されたとき、こう言った——〈今日のロシアでの飢饉の報道は、どれも誇張か悪意あるプロパガンダである。〉また彼のよく引かれるこういう言葉もある——〈スターリンがロシアの人民に与えているもの——これはロシアの大衆であって、西洋化された地主、産業家、銀行家、知識人でなく、ロシアの1億5000万の農民と労働者だが——それは、彼らが本当に望んでいるもの、すなわち集団労働、共同作業である。〉」（出典：ウクライナ人の抗議、ウォルター・デュランティの血生臭いニューヨーク・タイムズ・ピューリッツァー賞）

(2) “ホロドモール”（「飢餓による絶滅」を意味する）は、1932年と1933年にウクライナ・ソビエト社会主義共和国で起こった人為的飢饉であり、750万人に達するウクライナ人が死に追いやられた。この飢饉は“ウクライナの恐怖の飢饉”とか“ウクラ

イナの飢饉ジェノサイド”とも呼ばれているが、その期間中に、ウクライナの歴史で前例のない平和時の惨禍によって、数百万のウクライナ市民が餓死した。2006年以來、ホロドモールは、独立ウクライナと他の数カ国によって、ウクライナ人民のジェノサイド（民族抹殺）として認められている。（出典：ウィキペディア「Holodomor」）

（3）国家としてのウクライナは、スターリンの圧政的な政策のもとで大きな苦しみを味わった。ウクライナ人は、モスクワ人がロシア人であるように、ロシア人である。実を言えば、それは両方の場所で、ソ連傘下のもとに生活しながら、独裁的共産主義体制の矢面に立っていた人々である。これらの人々は、彼らの悪辣な非道徳的な指導層によって犯された残虐行為に対して、責任を問われることはない。**ソ連の権力構造を財政支援し、その発展のあらゆる時点で、ヒエラルキーを決めたのが誰であるかを理解することが肝要である。**そこに、この文明間の衝突の背後で長くくすぶり続けた反目の一因がある。